

時代の架け橋

登録文化財 綾部大橋の76年

⑥



綾部大橋にたくさん取り付けられた鉄。架設時の鉄の取り付け作業の様子は新宮さんに強烈な印象を残した

「綾部大橋」を渡っての中で特に印象が強かったのが橋脚の設置作業。潜水夫が川に入り、石ころや砂利を外に取り出す。この杭は元々、現在の綾部大橋が昭和4年6月に架けられる前にあった木造の「綾部橋」の脚の一部だ。水中にたえずむ杭を見るたび、味方は大変だと思った」

「この鉄骨が大型車両の進入を遮っているところが橋の延命につながる。今も綾部大橋が現役で市民の日常生活に欠かせない存在になっている」と新宮さんは願う。

「この高さ制限の構造物は今の形では景観が悪く、文化財としての橋にそぐわないと思う。たとえば針金などでバラのデザインの装飾を施すなど、もっと文化財にふさわしい形にしてもらえないか」と。

職人の見事な連携プレーに見とれた

町の新宮千秋さん(84)は幼いころの記憶が蘇る。新宮さんも幼稚園と小学校の登下校に使っていた木造の「綾部橋」の上から、そして近くに住んでいた民家の2階から、現在の橋が出来上がっていく様子を興味深く見ていた一人だ。

新宮さんは、弓状に鉄骨を組み合わせていく作業を鮮明に覚えている。そんな新宮さんが綾部

「河原で真っ赤に焼いた鉄が放り上げられ、工事用の足場に待機していた職人が火花の飛び散る鉄を金網の袋で受け取り、欄干にいとび職に渡し、すばやく鉄を叩いて

かしめる。見事な連携プレーが通行できないように

（細見仁史記者）

（細見仁史記者）

（細見仁史記者）

（細見仁史記者）

（細見仁史記者）

（細見仁史記者）